

小説における「ところ」節の使用傾向と その特徴について

加 藤 理 恵

キーワード：「ところ」節、「の」節、使用傾向、名詞修飾節

1. はじめに

本稿では、「ところ」節の特徴の検証の一環として、小説において「の」節も使用可能でありながら「ところ」が使用されるという現象について考察する。対象とするのは(1)に例示されるものである。坪本(1998:163)が(1a)の「ところ」節と(1b)の「の」節とが置き換え可能であると述べているように、(1a)と(1b)は類義表現である。

(1) a. AはBが逃げているところを捕まえた。

b. AはBが逃げているのを捕まえた。

しかし、その実際の使用には違いも多い。そこで本稿では、3編の長編小説における「の」節と「ところ」節の使用傾向を調査した。「ところ」節は「人を撃つ」「人を斬る」のような殺傷に関わる場面での使用傾向が高い。この結果は、「ところ」節の例に独自の意味があり、調査した小説では文学的な表現効果が高いと考えられていることを反映していると言っていいであろう。ではどのような効果が意図されているのか。それはどのようにして生ずるのか。以下では2節で調査結果を示し、3節で「ところ」節の例と「の」節の例を比較して感じられる意味の違いを記述する。最後にそれがなぜ生じるのかを4節で考察する。

2. 小説における実例の傾向について

以下は『流離譚』『丹下左膳』『珠玉百選銭形平次捕物控 (一) (二) (七)』

での「の」節と「ところ」節の使用回数を、主節の動詞をもとに集計した結果である。これらの作品を選んだのは、「ところ」節の実例が収集しにくく、一例も使用されていない作品もある中で、比較的多く収集できた作品であったからである。この使用傾向を「ところ」節の特徴の一つとして認めたい。なぜなら認知文法においては「スキーマの具体事例の使用頻度が高い場合には、繰り返し使用されることによってそのスキーマの定着度・活性度が上がるので、たとえより抽象的・一般的なスキーマに包含されうるものであっても、それには還元されずに独立に存在するものになる」(辻編 (2002: 250))とされており、具体事例の使用頻度が高い場合は記述すべきものと考えられているからである。

集計結果は、「の」節と「ところ」節の用例の数を縦軸にとり、作品毎に以下の図1、2、3に示した。動詞分類は、工藤(1985)をもとにした。工藤(1985: 45-48)は、「の」をとる動詞に「見る、見える、見物する、聞く、聞こえる」のような視覚、聴覚活動に関する「感覚動詞」と「待つ、手伝う、会う、直す、遅れる」のような動き=動作に関することを表す「動作性動詞」の二つのグループがあると述べている。「の」「こと」の両方をとる動詞には、「発見する、感じる、知る、分かる、気づく、おぼえる、思い出す」など、感覚活動、思考活動、伝達活動などさまざまな活動の結果として、対象を認知することを表す「認知動詞」と、「喜ぶ、悲しむ、驚く、期待する、賛成する、否定する」のような対象に対する、感情=評価的な、あるいは知的な様々な態度を表す「態度動詞」の二つグループをあげている。そのうち「動作性の動詞」については、本稿では「制止する、待つ、拾う、伝達する、打撃を与える、逮捕する、救助する」のそれぞれの類義表現とできる動詞群をその下位分類とした。「の」節については「のを」で検索した結果であり、それ以上の分類(レー・バン・クー(1988)、佐治(1993)参照)はしていない。本稿での分類はあくまでも便宜的なものであるが、傾向は示すことができると思われる。

図1 『流離譚』における用例数

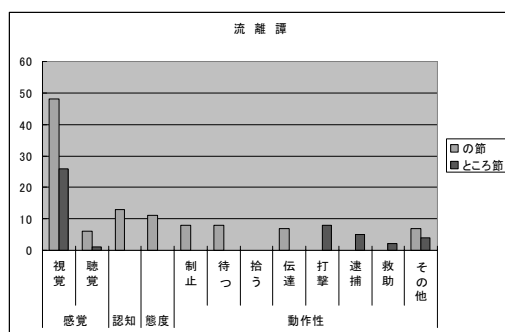


図2 『丹下左膳』における用例数

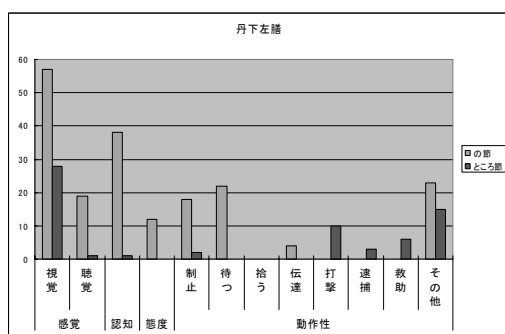
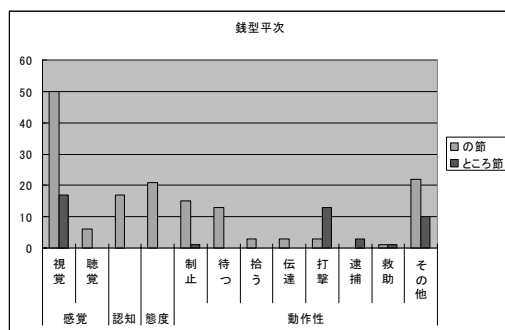


図3 『珠玉百選銭形平次捕物控 (一) (二) (七)』における用例数



結果は以下のである。収集した例文の総数は3作品で「ところ」節157例に対し、「の」節451例である。「の」節が多く使用されているのは、視覚を表す「見る」の場合である。ただしこの「見る」には、「見ると」「見れば」のように、認知動詞化¹⁾した場合も含めている。次いで聴覚を表す「聞く」、認知動詞の「知る」、「喜ぶ」など、対象に対する感情、評価的あるいは知的な様々な態度を表すとされる態度動詞が3作品に共通して多い。動作を表す動作性動詞の場合、「待つ」や「とめる」等の制止の動詞はあるが他の動作を表す動詞はそれほど多くない。先行研究においてよく引用される「捕まえる」の例は、この3作品では使用されていなかった。

一方、「ところ」節も視覚を表す動詞「見る」「見つける」の例が最も多い。次いで「殺す」「斬る」「撃つ」などの動詞がある。また「逮捕する」と類義関係にある動詞もあった。「ところ節」が使用されているのは、剣豪小説における殺傷・逮捕に関わる場面が多い。「撃つ」などの動詞が主節にある場合も「の」節は使用可能である。このことから考えると人を対象にした殺傷に関わるような場面や逮捕する場面にも、「の」節が使用されてもいいはずである。しかし、いずれの作品も「の」節は殆ど用いられておらず、わずかに『珠玉百選銭形平次捕物控』において、「突く」、「一思いにやる」、「(刃物を)たたきおとす」の3例があったのみである。

3. 「ところ」節の例の意味

本節では、「ところ」節の例と「の」節の例を比較した場合に感じられる差異を記述する。ただし、「見る」などの視覚活動に関わる感覚の動詞の場合は、「ところ」が「状況・場面」と置き換えが可能であることから「捕まえる」等とは別のタイプとする杉本(1994)、靱山(1988)に従い、考察の対象から除く。

3-1 先行研究

まず両者の意味の違いが先行研究においてどのように記述されているのかを見ていく。Josephs(1976)では次の例をあげて説明している。

- (2) a. 警察は泥棒が花子の財布を盗もうとするところを捕まえた。

- b. 警察は泥棒が花子の財布を盗もうとするのを捕まえた。

(Josephs (1976 : 350) 日本語表記及び下線は引用者)

(2a)は、警察が泥棒を花子の財布に手を置いたまさにその瞬間に偶然見つけて捕まえたことを示すが、(2b)では必ずしもそのような意味合いはない²⁾ (Josephs (1976 : 350))、とされている。

「ところ」節の例についての寺村 (1992 [=1978b]) の意味記述は、「事態の自然な進展があるできごとによってさえぎられる」「ある一定の軌跡をえがいてきたもの（あるいはこと）の進行が何かでさえぎられる」というものである。しかし、次のように「その瞬間に偶然みつけて何かをした」とも、当該事態が「遮られる」とも解釈できない例がある。

- (3) a. アーグラで「具合は悪くないか？ 医者に行っても治療代がいら
ない」と声を掛けてくる人には気をつけたほうがいいと思います。私
は今だに、これはよく思い付いたサギだと思っています。つまり、こ
ういうことです。まず、旅行者に薬を飲ませて体調が悪くなったところ
を、医者に連れていきます。

(hp.vector.co.jp/authors/VA008909/india97.html)

- b. ? 旅行者に薬を飲ませて体調が悪くなったのを、医者に連れていき
ます。

- (4) a. 夏の暑い日、庭一杯に麦を干し、麦が熱くて焦げてきたところをぶ
つ。暑い日でないと、うまく穂が落ちない。

(www.kumagaya.or.jp/~kame/chosa_memo/s590802.html)

- b. 夏の暑い日、庭一杯に麦を干し、麦が熱くて焦げてきたのをぶつ。
暑い日でないと、うまく穂が落ちない。

「偶然見つけて行動をする」ことは、(3)の詐欺を働く場面や、(4)の収穫の場面ではないであろう。次に何が遮られるのかを見ると、(3a)では「体調が悪くなった」のを遮っているわけではなく、(4a)は「焦げる」という事態がさらに進んでいく可能性がある。従って、これらの例では、何も遮られていないということになる。以上のことから、「の」節と「ところ」節の間には、同時性に

焦点があるかどうか、或いは当該事態が「遮られている」か否かだけでは記述できないような意味の違いがあると言える。

3-2 「の」節の例と「ところ」節の例の違い

これまでの例を「の」節にした場合、(3b)の「体調が悪くなったの」では、他にも「旅行客」がいるように解釈される。(4b)でも「焦げてきたの」の場合、他の状態の「麦」があるように解釈される。これに対して、「ところ」節の場合、＜対象を観察し、時機を待って首尾よく＞＜対象に働きかける＞という意味が感じられる。このことを、以下の例についても確認していく。

- (5) a. 彼は枝を削って棒をつくり、その棒で地ネズミや野ウサギを捕えて食べた——これらの小動物が自分が掘った穴の近くに後足で立って鳴いているところを、棒を投げて、殺すのだった。
- b. 彼は枝を削って棒をつくり、その棒で地ネズミや野ウサギを捕えて食べた——これらの小動物が自分が掘った穴の近くに後足で立って鳴いているのを、棒を投げて、殺すのだった。

上記例文の主節の動詞は「棒を投げて、殺す」であるが、首尾よく「捕えて食べる」ためには、単に棒を投げるだけでは目的は達成されないであろう。いつ、どんなく状況・場面＞で棒を投げ殺せばよいのかは、対象の様子を観察しながらはじめて決定されることである。そして(5a)の「ところ」節では、「地ネズミや野ウサギのような小動物が穴の近くに後ろ足で立って鳴いている」という状況であることが切り取られているのである。これに対して(5b)の「の」節では、複数の小動物がいるかのように解釈され、そのうち、穴の近くで立っているのを殺すと解釈されるだろう。次の例も同様である。

- (6) a. よくある術で、酔って帰ったところを、井戸へ突き落されたり、味噌汁の中に石見銀山が入っていたり、障子の外から真矢で射られて首筋に少しばかりだが怪我をしたり、ずいぶん執こくやるそうで（後略）
（『珠玉百選銭形平次捕物控（四）』）
- b. よくある術で、酔って帰ったのを、井戸へ突き落されたり、味噌汁の中に石見銀山が入っていたり、障子の外から真矢で射られて首筋に

少しばかりだが怪我をしたり、ずいぶん執こくやるそうで（後略）

- (7) a. 北洋の厳寒の荒波にもまれ、豊富なプランクトンをエサに回遊しているところを捕獲する、「沖獲りの紅鮭」ですので、脂とコクがあるから美味しいのです。 (list.auction.msn.co.jp/item/4562214-21k)
- b. 北洋の厳寒の荒波にもまれ、豊富なプランクトンをエサに回遊しているのを捕獲する、「沖獲りの紅鮭」ですので、脂とコクがあるから美味しいのです。

上記の例でも「ところ」節の場合は、「井戸へ突き落とす」、「紅鮭を沖獲りにする」ために適切な時機・状況を、対象を観察しながら待っていると解釈される。(6a)(7a)の「ところ」節の場合は、共に同一の対象の動きを追ったと解釈されるが、(6b)(7b)の「の」節の場合は、複数の対象が存在し、その中から選んでいるように解釈される。

このように「ところ」節では「小動物」「鮭」「被害者」の存在する＜状況・場面＞から一つの＜状況・場面＞を限定するのに対し、「の」節では対象を限定する³⁾。つまり、当該＜状況・場面＞に複数存在するであろうもの、人物からある特定のものが選択され、主節動詞の対象と解釈される。

3-3 固有名詞の場合

それでは、対象が「孫三郎」「お通」「柏戸」のように具体的な人物で、同定する必要はない場合はどうなるであろうか⁴⁾。

- (8) a. いえ、腕の良い人に斬りかけたわけじゃございません。私もこの通り足腰の不自由な年寄りですが、この上に孫三郎に悪業を積ませ、娘にも苦勞をさせたくないと思い、高軒で寝たところを一と思いに刺しました (『珠玉百選銭形平次捕物控 (九)』)
- b. いえ、腕の良い人に斬りかけたわけじゃございません。私もこの通り足腰の不自由な年寄りですが、この上に孫三郎に悪業を積ませ、娘にも苦勞をさせたくないと思い、高軒で寝たのを一と思いに刺しました
- (9) a. 吹矢を射たのは、目黒の浪次の悪戯で、お通を二階から突き落した

のは、下女のお新かも知れないが、お通の髪を切ったのと、お通が風呂に入ってるところを、上から蓋をして殺そうとしたのは、決して浪次やお新じゃないぜ。 (『珠玉百選銭形平次捕物控 (七)』)

- b. 吹矢を射たのは、目黒の浪次の悪戯で、お通を二階から突き落したのは、下女のお新かも知れないが、お通の髪を切ったのと、お通が風呂に入ってるのを、上から蓋をして殺そうとしたのは、決して浪次やお新じゃないぜ。
- (10) a. 大鵬、膝は良くないらしいが出足は良くなった。千秋楽、前場所と同じく柏鵬の1差決戦であったが、この場所は大鵬が突っ張り、柏戸が頭を下げるところを叩いた。柏戸はやはり四つん這いになって大鵬3連覇は成った。

(www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~tsubota/kiroku/k041.html)

- b. ? 千秋楽、前場所と同じく柏鵬の1差決戦であったが、この場所は大鵬が突っ張り、柏戸が頭を下げるのを叩いた。

本稿で収集したデータによれば、以上のように対象が固有名詞によって表されている場合には、「ところ」節のほうが好まれる傾向にある。それは、「ひと思いに殺す」「上から蓋をして殺す」「叩く」などのように対象に打撃を与える動詞や「つかまえる」のように対象の動き・状態を止める意味を持つ動詞が主動詞の場合には、「ところ」節を用いたほうが、明確に同一の対象の動きを追って<対象を観察し、時機を待って首尾よく><対象に働きかける>という意味が出るからだと思われる。

3-4 「瞬間に」との比較

これまで述べてきた「ところ」節の例の意味は、「瞬間に」と比較した場合にも確められる。

- (11) a. 逆にここに待ち伏せして、出てくるところをこうして不意に襲ったくせに、栄三郎にだけ剣を取らして、泰軒は一たい何処に潜んでいるのか……? (『丹下左膳』)
- b. 逆にここに待ち伏せして、出てくる瞬間にこうして不意に襲ったく

せに、栄三郎にだけ剣を取らして、泰軒は一たい何処に潜んでいるのか……？

- (12) a. 「アッ」仰け反る弁次郎。逃出すところを、ガラッ八に足の間へ薪を投り込まれたのです。 (『珠玉百選銭形平次捕物控』(四))
 b. 「アッ」仰け反る弁次郎。逃出す瞬間に、ガラッ八に足の間へ薪を投り込まれたのです。

「瞬間に」も二つの事態の同時性を示すことができる。しかし「瞬間に」が二つの事態の同時性を示しているだけであるのに対して、「ところ」節の場合には<対象を観察し、時機を待って首尾よく><対象に働きかける>という意味が感じられる。

4. 「ところ」節の例に<対象を観察し><時機を待つ>という意味が生じる理由

それではなぜ「ところ」節の例に上記の意味が感じられるのであろうか。以下では、4.1節で主節の動詞、4.2節で「ところ」と名詞修飾機能が構文の意味にどのように関わるのかを説明していく。

4-1 主節の動詞

本稿で収集したデータでは、「殺傷に関わる場面」には以下にあげるような動詞が使用されていた。

(13) 「殺傷に関わる場面」の動詞例

蹴る、殴る、打つ、ぶつ、殺す、撃ちとる、突き殺す、斬り殺す、絞め殺す、蹴り殺す、暗殺する、惨殺する、仕止める、撃ちぬく、撃つ、斬る、襲う、反撃する、攻撃する、突く、脅す、

言い換えれば、その使用傾向の高さとは、「人を撃つ」「人を斬る」のような殺傷に関わる場面に多く用いられていたというものである。

主節の動詞が「ところ構文」の意味に関与するのは、次の2点においてである。一つは主節の動詞の意味特徴である。(13)の動詞は<対象をねらって打撃を与える>という意味特徴があるものとしてまとめられる。

もう一つは「ところ構文」の主節の動詞のアスペクト的特徴である。「ところ構文」の主節の動詞はシタ・ラレタの形式であることが多い⁵⁾。可能形式も用いられない (Josephs (1976:352))。本稿のデータでは授受表現も稀である。つまり「ところ構文」は行為者の動作の完成を際立たせる表現と言える。この点においても、出来事の経緯を伝える場面で「ところ」節のほうが「の」節より好まれる理由が認められる。

4-2 名詞「ところ」と名詞修飾機能⁶⁾

「ところ」節に何が表されるのかを見るためには、名詞「ところ」と名詞修飾節の機能の関係も明らかにすべきである。確かに、名詞「ところ」が、芝居や映画の場面連続を対象領域として取ることができるだけでなく、その対象のある特定の行為場面を選び出す機能もあるという指摘 (田窪・笹栗 (2002:142)) がある。しかし本稿が名詞「ところ」の意味だけでなく名詞修飾の機能も見なければならぬと主張するのは、「ところ」のプロトタイプの意味は、「トコロは、およそ『場所／地域』に相当し、＜空間的＞＜範囲＞にまとめることができる」(粉山 (1992:189)) とされているからである。例えば、修飾語がない「トコロ変われば品変わる」のような例においては、＜場所・地域＞としてしか解釈されない。つまり、「ところ」がある＜状況・場面＞を表すには、何らかの修飾語句が必要なのである。このことから、＜状況・場面＞の限定を正しく理解するには「ところ」だけでなく、その修飾構造がどのような働きをするのか、関係節の成立条件についても考察する必要があるということが明らかになる。

名詞を修飾する構文の分析については、構造的な観点だけでは不十分であるとして、語用論的な要因を重視する見方 (白川 (1986)、松本 (1993)、加藤重広 (1999)) がある。意味論的な要因については、加藤重広 (1999) で詳しく考察されており、次の条件が出されている。

(14) 関係節構造の分別指示条件

関係節構造が成立するには、当該の関係節構造が指示するものがそれによって指示されないものと容易に区別でき、その関係節構造の意味上の補

集合に当たる情報が活性化されなければならない。

(加藤重広 (1999 : 143))

これは、例えば「赤い」がつくことで「赤くない服」は排除される、ということである。つまり、「服」の中でも「赤い服」に限定されるのである。

名詞「服」は単独で使用可能であるが、名詞の中には「意味的に限定されなければ使えない」(加藤重弘 (1999)) ものものもある⁷⁾。名詞「ところ」もその一つである。「ところ」が<状況・場面>を意味するには修飾語句が必要となるが、そのとき、(14)の「関係節構造の分別指示条件」が関わってくる。「ところ」自身は「ある全体を視野に入れながら、その一部にスポットを当てるときそのスポットの当たる部分」(寺村 (1984 : 290)) を表すが、「関係節構造の分別指示条件」によって主節の述語と関わる対象が存在する<状況・場面>と、それによって指示されない<状況・場面>とを区別するという意味の限定が、さらに明確に行われると考える。従って、「ところ」節が示す、対象が存在する特定の<状況・場面>は、名詞としての「ところ」とその修飾構造という2つの要素の相関に基づくものと考えられる。

5. おわりに

本稿では「ところ」節と「の」節との小説における使用状況及び意味の違いを示した。調査をした小説では、殺傷に関わるような場面で「ところ」節のほうが好まれている。その理由を以下のように説明した。「の」節では複数の対象から一つを選択するのに対して、「ところ」節では複数の<状況・場面>から一つを選択する。それが<対象をねらって打撃を与える>という主節の動詞の意味特徴及び名詞修飾機能と相関し、「ところ」節の例に<対象を観察し、時機を待って首尾よく><対象に働きかける>という意味が生じる。

注

- 1) 「認知動詞化」とは、工藤 (1985 : 49) で「見る、見える」のような基本的に「ノ」をとる感覚動詞において、対象が目ではとらえられないような心理的、抽象的なもの

である場合、「認知する、知る」という意味になりながら（つまり認知動詞化しながら）「ノ」「コト」の両方をとるようになる、という記述によるものである。

- 2) While (52a) with S Tokoro o implies that the police happened to discover and catch the thief at the exact moment when he was putting his hands on Hanako's purse, (52b) with S no o does not involve such a precise coincidence of events.

(Josephs (1976 : 350))

Josephs (1976) は、主節の動詞が視覚を表す場合についても次の例をあげ、(ib) の「の」節が事象全体を見たことを示すのに対し、(ia) の「ところ」節は従属節の事態が起きようとすることを、或いはその事態が進んでいくことを偶然見たことを示すと述べている。

- (i) a. 幸子が向こう岸からこちらまで泳ぐところを見た。
b. 幸子が向こう岸からこちらまで泳ぐのを見た。

(Josephs (1976 : 350) 日本語表記及び下線は引用者)

- 3) Ohara (1992:105) は内在型関係節には「ものを同定する機能」があるとしているが、レー・バン・クー (1983) では「の」の用法の一つとして、前方限定の用法という用法を挙げている。このことは、佐治 (1993) で代名詞的体言という「の」の特徴によるものと考えられる。「の」は、下に来るべき体言を省略する用法から、代名詞的体言の用法、準代名詞の用法が生まれたとされている。代名詞的体言の用法には「人妻と我がのと二つ思ふにはなれこし袖は哀まされり」という例が、準代名詞的用法には「私が買ったのはこの辞書です」という例があげられている。
- 4) 加藤万理 (2005 : 8) は、一般に非制限修飾しか持たないといわれる固有名詞が制限的に修飾される状況について考察している。その中で、「三十年の歳月は人を変える。私が知っている柳原はこんな人間ではなかった。」という例をあげ、時間的推移による一人の人物の側面を描写する修飾もあることを述べている。
- 5) 主節の動詞について川越 (1990 : 140) は、「述語動詞が受身になるのが普通である」と指摘している。
- 6) 「名詞修飾」は形式名詞の「ところ」が修飾されるという寺村 (1978a) による。
- 7) 「前、後、上、下」などに代表される、寺村 (1975-78a) の「相対名詞」、奥津 (1974)

の「相対名詞」、井上和子（1976）の「関係名詞」の特徴を集約したものである。

引用文献

- 井上和子（1976）『変形文法と日本語（上）』大修館書店。
- 奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』大修館書店。
- 加藤重広（1999）「日本語関係節の成立要件(2)——文法的要因と語用論的要因——」『富山大学人文学部紀要』31, 71-156, 富山大学人文学部。
- 加藤万理（2005）「日本語の制限・非制限修飾に関する一考察」『日本語文法』5(1), 3-19, くろしお出版。
- 工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学』50(3), 45-52, 至文堂。
- 佐治圭三（1993）「『の』の本質——「こと」「もの」との対比から——」『日本語学』12(11), 4-14, 明治書院。
- 白川博之（1986）「連体修飾の状況提示機能」『言語学論叢』5, 1-16, 筑波大学一般・応用言語学研究室。
- 杉本武（1994）「『警察はその泥棒がにげていくところを捕まえた』再考」『九州工業大学情報工学部紀要』（人文・社会科学篇）7, 109-132, 九州工業大学。
- 田窪行則・笹栗淳子（2002）「日本語条件文と認知的マッピング」大堀壽夫編『シリーズ言語科学3 認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』135-161, 東京大学出版会。
- 辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社。
- 坪本篤朗（1998）「文連結の形と意味と語用論」中右実編『日英語比較選書3 モダリティと発話行為』100-193, 研究社出版。
- 寺村秀夫（1975）「連体修飾のシンタクスと意味——その1——」『日本語・日本文化』4, 71-119, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- （1977a）「連体修飾のシンタクスと意味——その2——」『日本語・日本文化』5, 29-78, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- （1977b）「連体修飾のシンタクスと意味——その3——」『日本語・日本文化』6, 1-35, 大阪外国語大学研究留学生別科。
- （1978a）「連体修飾のシンタクスと意味——その4——」『日本語・日本文化』7,

1-24, 大阪外国語大学研究留学生別科.

—— (1978b) 「『トコロ』の意味と機能」『語文』34, 大阪大学国文学科, 寺村 (1992) 所収, 321-336, くろしお出版

—— (1984) 『日本語のシンタクスと意味』Ⅱ, くろしお出版.

—— (1992) 『寺村秀夫論文集』Ⅰ, くろしお出版.

松本善子 (1993) 「日本語名詞句構造の語用論的考察」『日本語学』12(1), 101-114, 明治書院.

棚山洋介 (1988) 「トコロ補文を含む文の構造」*Litteratura* 9, 25-35, 名古屋工業大学外国語教室.

—— (1992) 「多義語の分析——空間から時間へ——」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』185-199, 名古屋大学出版会.

レー・バン・クー (1988) 『ノによる文埋込みの構造と表現の機能』くろしお出版.

Josephs, Lewis S. (1976) "Complementation." In Masayoshi Shibatani ed., *Syntax and Semantics* 5: 307-369. New York: Academic Press.

Ohara, Kyoko Hirose (1992) "On Japanese internally headed relative clauses." *BLS* 18: 100-108.

用例の出典

用例データは、『新潮文庫の絶版100冊 (CD-ROM版)』およびGoogleを使用しインターネット上に公開されている文書から収集したものである。

付記

本稿は、2007年12月21日「第9回東アジア言語文化フォーラム」における口頭発表を加筆・修正したものです。ご教示・ご意見をいただいた方々に深く感謝申し上げます。